

清朝社會史

第一部第一輯「國家」

佐野 學 著

昭和廿二年十一月三十日文求堂刊
B 6 列 一四二頁 價三十五圓

著者は周知の様に元日本共產黨指導者、大正六年東大法科（政治科）卒業後労働組合運動に参加、第一次、第二次共產黨事件に關係した爲、前後十四五年獄中にあり、その間昭和八年一國社會主義を唱へて共產黨から離れたが、現在に到るまで長年政治運動を續けた人で、その傍ら大正十年から十二年にかけて早大の講師として日本經濟史を講じてゐるが、その經歷は所謂アカデミツクな東洋學者とは違つた特異性を持つ。本「清朝社會史」もその經歷を反映して、正式に中國史を學んだ事の無い著者が在獄中昭和十五年前後から「獄則で縛られ、外部との交渉を絶たれ」原典の入手も最近史學者の業績を知ること大いに困難であつたと云ふ異常な環境の中で風船貼り等の仕事の合間合間に、書かれたものである。三部八冊から成る全篇を読むに際して、此の著者の經歷と執筆時の環境は常に考慮されなければならないが、著作の意義は、結局著作を通して汲み取らる可きであるから以上の二點は一應度外視して、第一部第一輯を紹介し、私見を述べたい。

第一部「國家と社會」は第一輯「國家」第二輯「家族」の二つに分れる。第一輯、特にその序論と第四章には著者の考へ方が要約せられ第二輯及び第二、第三部の總論とも云ふ可き體をなす。例へば、序論第一に述べられてゐる所謂舊中國六つの歴史法則の中第二の中間的社會團體優越の法則を數

衍したものが第二輯「家族」であり、第二の階級相互疎隔の法則を敷衍したものが第二部「社會階級」であり、第五の王朝交替と農民反亂との必然的關聯の法則が第三部「農民暴動」の原型をなす等。特に第二輯「家族」がそこに於て共に述べらる可き村落、ギルドが未だ稿を成し得てゐないと云ふ理由で省略され、僅かに家族のみが主として、而も内容的に貧しく取り上げられてゐるのに較べると確かに第一輯は重味を持つてゐる。だがそれは構成の上からのみ云へる事であつて内容的には非常に雑多でありまとまりが無い。多くの事を云はんとして中心がぼやけたり、同じ事を數ヶ所できくり返して却つて讀者には焦點が掴み難い。實際に就いて見よう。

本輯の主題は云ふまでもなく清代國家の實體であるが、それが究明に先立ち一應清代國家に到る所謂舊中國國家系列の歴史の概観がなされ、而も中國のみを切り離して考へずアジア史的世界史的觀點から取り上げられてゐる。この取り上げ方はその限りに於て正しい。

先づ舊中國國家はアジア的國家としてヨーロッパ國家に對立し、同時にアジア的國家の中でも南アジア的國家として、北アジア的國家に對立する。何故それが兩者に對立して、北アジア型國家に類別されるかは本輯一四二〇頁に論じられてゐるが、此の考へ方の根本は餘りにも非歴史적でありお粗末である。例へば、ヨーロッパ國家とアジア的國家とを類別する第一の基準は前者が狭い地域における諸民族の商業的交通を基礎とするに反し、後者が農業本位の社會を基礎とする事にあると云ふのだが、單に抽象的な商業的交通を以て國家

の實體が律せられるものではない。ヨーロッパ國家に於ける商業的交通そのものにも本質的には農業社會を基礎にした長い時代があつたのであり。逆に中國國家にもその内部社會に於て單純商品生産が行はれた限り、商品としての諸物資が海陸兩路を通じて流出した事はすでに吾々の常識である。むしろ、一般的な商業的交通は商業資本が存在する限り、存在し而もその商業資本は著者も云つてゐる如く「單純商品流通と貨幣流通さへあればいかなる生産様式の下でも存在し得る」

(本 轉) 九八頁) であるから、商業的交通を基礎とする國家と云ふ事自體が成り立たないのである。又、ヨーロッパ國家の政治原則が民主主義であるに反し、アジア國家のそれが權威主義であると云ふ對立契機も極めて非歴史的である事はヨーロッパ國家にも權威主義を原則とした長い時代があつたと云ふ歴史事實を示すだけで十分であらう。北アジア的國家と南アジア國家の對比に就いては夫々數ヶ條の原則なるものを擧げて立證してゐるがこれも納得出來ぬ點が多い。即ち北アジア的國家の第一、第二の原則は氏族社會から國家への飛躍が典型的に行はれ、而もそれが征服國家として成立する事にあると云ふのだが、氏族社會から征服國家へ轉化するのには單に北アジア的國家にとどまらずヨーロッパ國家に於ても又、南アジア的國家の典型と云はれる中國國家に於てもそうである。もとより著者の云はんとする所は、前者の、轉化過程が飛躍的に爲されるに反し後二者のそれは原始國家でふ一つの國家形態を経て、征服國家に轉化する所にあるのだらうが、實は此の原始國家でふ類型は私には認め難いのである。假に一步ゆ

づつて、前者が氏族社會から直ちに征服國家へ發展し、後者にあつては、その發展過程が、色々なまはり道を経たにしろ、それは兩者に於ける夫々の轉化過程のニュアンスの相違なのであつて本質的な、從つて原則的な差ではない。ニュアンスは決して度外視されてはならない。しかし、ニュアンスを原則にすり變へる事は、國家の發展系列に對する、又、歴史の發展過程に對する根本的な考へ方をあいまいにさせ誤らせるものだ。北アジア的國家の残りの諸原則は何れも、權威主義の原理を持つたとか、絕對的な君主主義が支配するだとか、歐亞に跨る大帝國だとか等専ら國家の形式乃至は政治過程に就いての表面的な觀察であつて、北アジア的國家の内容と實體に就いては一切論じられてゐない。

確かに北アジア―滿洲よりシベリア中央アジア裏海地方を経てカウカサスに至る―の游牧地帯に建設された多くの國家群は中國内地の諸國家とは同日に論ぜられぬ多くの點をもつだらうし、又著者もくり返へし云つてゐる如く、南北兩アジア要素の鬭争はアジア史の從つて中國史の大きい問題であつて、當面の課題たる舊中國國家如何の問題に就いても少なからぬ關聯を持つ。しかし北アジア諸國家が重要であればあるだけその實體内容に就いての詳細な檢討が必要なのだ。問題を移そう。著者に依れば、國家は氏族制社會から原始國家として發生し、奴隸勞動制征服國家、封建主義國家、資本主義國家、社會主義國家へと發展する。これが著者の所謂世界史的に見た場合の國家の發展系列であるが中國にあつては特殊な發展のし方をする。即ち殷代に原始國家が成立する事は同じ

であるが周代から戰國時代に到る征服國家群はアジア的奴隸制で特殊の内容を持ち、漢唐時代の封建主義國家もその内容はアジア的な特殊の相を帯びる。宋よりはじめて本來的封建主義國家へ轉じ清朝國家も依然此の國家範疇に屬し、辛亥革命にはじまる新中國は第五段階として現に進行中（如何なる國家形態かには觸れる所がない）だと云ふのである。然らばこれらの中國國家は夫々如何なる内容を持ち、又如何なる轉化過程を取つたか。原始國家に就いてはそれが「氏族社會内部の分業や階級分裂の發生によつて生じた社會的權力にもとづいて發生する」とだけ述べられてゐて（本稿）その具體的内容を知る由がないが、同氏の「日本古代史論」（昭和廿一年國民社）によれば、氏族社會に於ては自然發生的關係が人と自然との間、人と人との間において支配する。しかるに生産の組織や指導成員間の争ひの裁宗、他の共同體との鬭争の爲に一定の權力作用が不可避的に發生し社會的機能の最初の分化として、呪術師や軍事的指導者ができる。……しかしこれらはまだ世襲的でなく選舉されるを本質とする。この權力作用にめざめた社會は國家の萌芽であり、國家性を帯びた共同體である。そして此の共同體が數多く集つて共同利害共同血液觀念の紐帶の下に政治的な種族を結ぶに到り……權力行使者が選舉から世襲に移つて君主が生れる。……君主はまだ獨裁的でなく權力に神權的絕對性がまだ生れず多量に選舉時代の佛を存しかつ呪術的性質が強い。これが原始國家であり、世界史に例を取れば、パピロニア人に追はれたスメリア人の國家ギ

リシヤ人によつて滅ぼされたミケーネ文化の國々、古代アメリカのインカ王國、日本の出雲邪馬臺兩國、周人の餌食となつた殷人の國家などがそれであると云ふ。氏の定式化せるこの原始國家なるものは成程殷代中國に當てはまる節々が多い。しかし今引いた様に結局それは國家的權力の發生を中心とする政治過程から、而も呪術師軍事指導者選舉君主世襲君主等の支配階級の權力發生過程からのみ導き出された概念である。清代國家を否中國史を主としてその社會組織社會構造から理解しようとする（清朝社會史自序）著者としてはやはり殷代中國をもその社會構造から理解しなければならぬ。更に著者によれば歴史の眞内容は「生産者大衆の精神的物質的生產」であらねばならぬ筈である。（日本歴史の新しい考へ）而も原始國家にあつては「母權的傳統や共產主義的勞働がなほ支配する」（同上）のであるなら著者自らの考へに従ふと、結局それは原始共產社會の範疇に屬するものでなければならぬ。一方先に引いた様に原始國家は「氏族社會内部の分業の階級分裂」によつて生じたと解されてゐるから著者の考へに忠實に従ふとそれは明らかに發生の當初から、階級國家でなければならぬのであつて決して原始共產社會ではない。先に原始國家なる範疇を認め難いと書いたのは、著者の原始國家なる概念がこの様に分裂し矛盾してゐるからである。思ふに著者の此の混亂は歴史を社會構造から、生産者大衆の在り方から眺め様としつつ一方では「人間の眞の歴史は國家と共に展開せられる」と云ふ國家重視の立場にも捉はれこの二つの立場には

さまれて、あちら行きこちら行きしてゐると云ふ著者の根本的な考へ方の混亂に根ざすものだ。

次に此の殷朝を征服してあらはれる周、及び春秋戰國の諸國家は所謂征服國家であるが、これらを他と類別する内容は「この古代國家でも奴隸勞働が生産の基本形態となり、

この慘虐なしかし規律化された忍苦的な勞働を通じて人類の文明が組織されるのであるが西洋のギリシヤ、ローマの純然たる奴隸制度と異り、東洋では生産が農業を基礎として商品の生産及び流通を缺いてゐたことと照應してその奴隸勞働は村落に定住する不自由民の形態を取つた。

かれらは征服者の氏族や王族や國家に集團的に隸屬し、租税や徭役を村落團體の連帶責任で納めるが、村落内部では自治がゆるされる」(本輯)と云はれる、所謂氏のアジア的奴隸勞働形態に外ならない。もとより著者が「原始國家より文化は低いが……旺盛な力の衝動に溢れる征服種族が成長し原始國家を襲撃し……かくて前代の原始國家とは比較にならぬ程規模の大きい、かつ組織性に富んだ國家が成立する。眞の國家は征服の熔鑪爐を通らずには成立しない。……人間が國家によつて自然的存在から自覺的存在に高まるための必要條件はまず征服である」(日本古史論)と考へ征服に重點を置き征服國家なる名稱を用いたのであらうが、著者自ら、これらの國家群が、アジア的奴隸制を基礎とすると云つてゐるし、征服によつて中國に國家を建設したのは、これらの諸國家にとどまらず、氏によつて、征服の衝動に乏しいと云はれる殷朝です

から、山東の一角から西方に進出し、先住農耕民族を征服したのであるから(貝塚氏の)征服てふ政治的軍事的行爲のみが此の新しい國家形態の内容規定を賦與するものでない事は明らかである。此の意味で著者の重要視する征服なる概念を一應考慮の外に置くならば、周代及び春秋戰國時代の國家群が事實氏の云ふアジア的奴隸制を基礎としてゐたか否かが問題となる。これに就いては氏は原典からの考證を全然加へてゐない。殊に當時の奴隸が村落内部で自治が許されてゐた事など如何なる史實に基づくものか不明である。一般に周代の中國が生産奴隸を基礎にしたか否か、又此の奴隸制國家形態がいつまで續いたかには諸説あつて一定しないが「支那社會構成」に於ける秋澤修二氏の説「ギリシヤローマ時代の様な典型的な形は取らないが基本的には殷末周初を種族奴隸制の時代、春秋戰國前漢時代を生産奴隸制の時代、漢の後期より唐にかけてを封建制社會への過渡期とする」が最も當を得てゐる様に思ふ。しかし、評者としては未だ原典に當つて検討してゐず、秋澤氏の擧げてゐる史實に不十分な點もあると思はれるので、此の問題は今後の自らの課題とした。ただ所謂原始國家から征服國家への轉化過程が征服なる軍事的政治的過程のみから究明され得ない事だけは明らかで佐野氏も此の點に關し、原始國家側の内部矛盾(貴賤貧富や生産様式)の行詰り等)の深刻化を指摘してゐるが、此の場合の貴賤貧富の對立がどの様に又何故原始國家の内部矛盾を深めたか、或ひはここに云ふ生産様式の行き詰りとは何か、特に、著者が止揚し

た筈の唯物史觀に於けるそれとは如何に異なるか等に就いては一切略されてをり、又征服者側の征服を可能ならしめた内部的要因に就いても何ら言及されてゐず、ここでも國家形態を決する社會構造や、國家發展の動因に就いての大きい根本的な問題がぼかされてゐる。

「次に世界史的にみて奴隸が解放されて農奴が現れて來るのであるが東洋社會ではアジア的奴隸制が次の社會への發展條件を十分形成しないため、その解放過程も不徹底で直接生産者の大部分を占める農民はもはや前代のやうな不自由民でなくなつたとはいへ地代徭役の負擔重く且つ移轉の自由を奪はれた國有農奴の如きものとなつた」(本輯二頁) これがアジア的封建主義を特徴とする漢唐國家であり、唐宋初以來始めて本來的封建主義の諸要素——單純商品生産、小地主、都市の成立、商業路の發達等——が現はれ、人民は國有農奴的地位から次第に解放され國家から自由である私人が發生し市民の層が形成されるに至つた。これが宋より清代に及ぶ本來的封建國家であると云ふ(本輯二頁) 即ち漢唐時代の中國國家は國有農奴を基礎とする故にアジア的封建主義國家であり、宋より清代にいたる中國國家は單純商品生産、小地主等の諸要素があらはれ農民が國有農的地位から解放されて、自由な私人となり市民層が形成されたが故に本來的封建主義國家だと云ふのである。

此處でもかなめの重點何故—アジア的奴隸制が次の社會への發展條件を十分に形成しないのか、漢唐國家を特徴づけ且

つそれを前後の諸國家と類別する國有農奴とは如何なる内容を持ち、如何にして發生發展崩壊したか、自由なる私人、市民層とは何か等——が明らかにされてゐない。もし此の國有農奴が「嚴格な意義における土地私有は南アジアには十分發展しなかつた。國家が土地の所有者であつた。人民の大部分を占むる農民は國有農奴の性質をもつた」(本輯一九頁)と云ふ意味のものであるなら、それが、まさしく誤りである事は云ふまでもない。漢唐時代の諸政府が所謂豪土地私有の擴大に如何に惱まされたかは、もはや疑をはさみ得ない事實だから。

アジア的封建主義國家なるものがかかる誤謬に立脚してゐる以上それを克服して登場す可き所謂本來的封建主義國家の實體如何の問題も、正しく解決される筈はなく、果して單純商品生産、小地主、都市の成立商業路の發達等がその形成要素とされてゐる。此處にいたつて、著者の中國社會史に對する認識の不足と史觀の無内容さが如實に暴露されたと云ふ外はない。これらの諸要素が宋以後はじめてあらはれたとする事が前者の證據であり、かかる諸要素を以て國家社會の發展系列を律する事が後者の明證である。又この本來的封建主義國家が如何に發展し如何に崩壊し、どの様に次の時代を準備したかに就いても以上に劣らぬ混亂ぶりを示す。第四章のすべてがそれで清代國家が、如何に發展し次の新國家へ何を準備したかは結局示されず、徒らに傳統的、進歩的と名づけられる諸現象がまとまりなく、羅列されてゐるに過ぎず孫文に關する斷片的記述で本輯は終つてゐる。云ふまでもなく本輯

の主題が清代國家の實體如何にあつて而もそれが本來的封建主義國家と規定され、且つ舊中國國家の最後のものであり、新中國國家成立の準備時代と考へられる以上、第一に本來的封建主義國家の明確な概念規定第二にその成立過程第三にその發展過程が、夫々史實に即して、歸納的にはつきり描き出されねばならない。本輯ではそれが明らかにされず中國史の法則とかヨーロッパ的、南北アジア的國家の類型づけとか、中國國家、清代國家の特質とか、清朝政治過程の常識的解説とかに徒らに多くの頁數が費され、結局清代國家とは如何なるものかの中心課題が解されないのである。中國史に對する著者の根本的な方法論的基礎が、「中國特殊的なものの民族固有的なものの發見、近世中國特有的なものの把握、中國史における世界史的、アジア史的契機の把握、生産力、發展段階の見地、外來的要因よりも內在的要因の重視、權力と勞働の相剋又は調和社會的形質の發見、階級の役割、矛盾を通ずる發展の見地、社會心理の把握」等（自序）餘りにも多様で統一のない事にその窮局の原因があると思ふ。

「中國は古い歴史の國であるから、新しい中國の本質的な理解は舊い中國の本質的理解なくしては得られない。それは政治過程よりも社會組織社會生活の理解に主要努力が向けらる可きである。舊中國の爛熟期であり新中國の過渡期たる清代中國の社會構造の理解は此の意味で非常に大切である（自序）」と云ふ考へに基き中國史を政治史、文化史等々としてでなく、社會史として且つ、特に清代社會を取り上げ更に清代を主題

としつつそのみを切り離して考へず、所謂發達段階的に、廣くヨーロッパ、アジア世界との對比に於て問題を探求せんとした著者の意圖には敬意と賛意を表するがその總論とも云ふ可き本輯に於てその意圖が十分に果されなかつた事は残念である。

〔里井 彦七郎〕